

【共催会議報告】



共催会議報告

科研費重点領域研究「人工現実感」 公開シンポジウム参加報告

柳田康幸

(東京大学)

文部省科学研究費補助金重点領域研究「人工現実感に関する基礎的研究」の平成8年度公開シンポジウムが、12月9日に豊中市千里ライフサイエンスセンターサイエンスホールにて開催された。科研費重点領域「人工現実感」は、平成7年度よりスタートしたプロジェクトで、本学会に参加している大学関係者も数多く関わっている。

シンポジウムでは、午前午後合わせて以下の5件の講演が行なわれた。会場はほぼ満員の参加者で埋まり、活発な質疑応答が行なわれた。

「VRの現状と今後への期待」

館 暲 (東京大学 大学院工学系研究科 教授)

「福祉社会とVR技術」

伊福部 達 (北海道大学 電子科学研究所 教授)

「医学とVR技術」

藤正 巖 (埼玉大学 大学院政策科学研究科 教授)

「VRとコミュニケーション」

岸野文郎 (大阪大学 大学院工学研究科 教授)

「人工生命とVR」

森田修三 (富士通研究所 パーソナルシステム研究所)

館教授は、まず重点領域研究の全体像について説明を行ない、「Virtual とは虚構あるいは架空という意味ではなく、形としてはそのものでなくとも本質的あるいは機能としては同じという意味である」ことを重ねて強調した。その後、館教授のバーチャルリアリティ研究の原点ともいえるトレイグジスタンスの研究から最近の研究成果まで流れを追って説明した。さらに、バーチャルリアリティと関連

の深い通産省のプロジェクト「ヒューマンメディア」および「アールキューブ」について紹介し、同時に本学会の活動についても紹介を行なった。

伊福部教授は、福祉工学という分野に立脚して、20年にわたる福祉機器およびそのための基礎技術に関する研究開発の成果を紹介した。失われたり衰えた感覚機能を他の残された感覚や神経を通じて現実に近いイメージを惹起させるというアプローチであり、大脳における連合の成立、脳の可塑性と深く関わっている。個々の研究開発事例については長くなるので省略するが、いずれも人間を中心とした技術のあり方を具象化したものであり、VR研究開発に携わる者としては大いに規範としたいところである。

藤正教授は、医療分野の立場から講演を行ない、医療の現場においてVRの最先端技術が活発に投入されつつある現状について、低侵襲外科や神経インタフェースなどの豊富な事例を交えながら医療とVR技術との関連について述べた。それぞれの事例もさることながら、報告者が特に興味深かったのは、治療機器と診断機器の性格の差異に関する藤正教授のコメントである。すなわち、診断機器は主に工学者の立場から発想・発明されたものが多い(seedsから)のに対して、治療機器は現場の医者からの発想・発明によるもの(needsから)でないといふ話である。VR技術が世の中に浸透していく過程において、技術の研究開発を行なう工学者の立場からだけでなく、それが実際に用いられる現場と密接な連携をもって研究開発が行なわれることの必要性を痛感させられる。

岸野教授は、VRをコミュニケーション支援の道具としてとらえ、その実例としてATR 在籍時代に行なってきた臨場感通信会議システムについて講演を行なった。このシステムは日本におけるVR研究開発の中でも特に有名なものであるが、この研究に係る数多くの要素技術の研究開発の成果が一堂に紹介され、興味深い講演であっ

た。

森田氏は、コンピュータをメディアとしてとらえた時の Interactive 性に立脚した講演を行なった。親しみのあるヒューマンインタフェースをキーワードに、コンピュータの中に「生きているように見える」エージェントを工学的なモデルとして確立する研究開発を行ってきた。クラゲのような形のエージェント「シャルロット」は有名な事例である。また最近空を飛ぶイルカのような「FinFin」とい

うキャラクターを「Teo」というソフトの中に登場させた。これは既に市販されており、一般市民が生活の中で身近に触れることの出来る事例としても注目に値するだろう。

シンポジウムでは、講演会の他、同センターに所在する（財）イメージ情報科学研究所の研究室見学も行なわれた。

(News Letter Vol. 1 No. 8より転載)